

ポラリスを仰ぐ北の大地から

求む 新型コロナの取説

北広島医師会 会長 對馬 伸泰

2019年12月に中国武漢で発生した新型コロナウイルスは、世界を恐怖に陥れいまだに収束の出口が見えない。この間数多くの学者が研究発表したが、いまだにコンセンサスが得られておらず、政府、自治体の対策も頓珍漢なものも散見される。この機会に一度いくつかの疑問を整理してみたい。

①コロナはただのかぜなのか？重病なのか？

全世界のコロナ死亡者数がとうとう100万人を超えた。これに対して日本では1,500人程度。欧米の死亡率とは2桁の違いがある。死者が高齢者、合併症を持つ患者に多いのは世界共通、では日本人におけるFactor Xは何なのか？日本人は清潔で手洗いをこまめに実行し、三密も避けたからか？ACE 2受容体が日本人には少ないからか？京都大学の上久保教授は、コロナには弱毒のS型とK型そして強毒のG型があり、日本においては12月から弱毒型のS型、1月にはK型が入ってきて日本人の多くが集団免疫を獲得したという。そのため、G型に対しても免疫が獲得され、死者が極端に少ないとしている。この説が正しければ我々日本人にとってはさほど恐れる必要はないのかもしれない。

②PCR検査の取説

ご存知のようにPCR検査は現在の感染の有無を確かめるものである。したがって当日有効のチケットみたいなもので翌日からは無効と考えた方がよい。東京のある区で区民全員に行う検討がなされたようであるが全く無意味といえる。

③Withコロナをどう乗り切るか

世界各国では政策が180度違う国もある。スウェーデンはほぼ日常生活、ニュージーランドは数人でロックダウン。日本はどうすればいいのか？日本人がコロナに強いのは事実。高齢者や合併症がある患者を除き一般国民はせいぜいインフルエンザと同等の対策でいいのではないだろうか？どなたか聡明な科学者が早急にエビデンスを発見し、以前の平常の日本、Beforeコロナが戻ることを願ってやまない。

キューバ旅行

渡島医師会 会長 宮村 拓郎

久しぶりに、「老人と海」を読んできた。その理由は、今回、キューバ旅行を題材にしようと思ったためである。あらためて読んでみて、この小説の舞台は、ヘミングウェイが愛艇を停泊させていたハバナ近郊にある漁村であるのを知った。そして、主人公がよく酒を呑んでいたのが、私が訪れた「ラ・テラサ」というレストランなのであった。

妻と二人で訪れたのは、2018年末から2019年の年始である。メキシコシティ経由で向かったが、乗り継ぎ便の遅延で成田を発って23時間後にハバナに到着となった。

キューバ旅行を思い立ったのは、「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」というキューバ音楽のレジェンド達に焦点をあてたDVDと出会ったため、キューバ音楽のなんとも言えない哀愁を帯びたメロディやラテン特有のリズムに魅了された。そして、1950年代のアメリカ車を中心とするクラシックカーがレストアされ現役で走っている光景をこの目で見てみたいと思ったからである。私より少し若い1954年製の真っ赤なフォードのオープンカーでのハバナの市内観光、旧市街にあふれるキューバ音楽、ヘミングウェイの行きつけのバーで彼の胸像と一緒に飲むフローズンダイキリ、オープンエアーのバーでカクテルを呑みながら聴く生演奏等、思い出深いものばかりであった。

片道に、丸一日を要する長旅で疲れたためもう二度と行くことはないだろうと思っていたが、最近はキューバのあの青い空と海がなぜか懐かしく感じられる。そんなわけで、休日の午後に妻と一緒に飲むカクテルは、ヘミングウェイが愛したロングカクテルのモヒートなのである。

